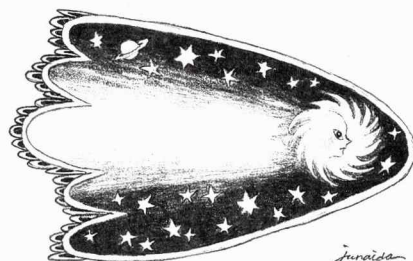


朝日

歌壇
俳壇

＜日曜日のプロローグ 20＞ junaida

大串 章 選

焼夷弾降りし夜空に盆の月

（前橋市）武藤 洋一
ブルームス聴きし余韻に端居して（長崎市）徳永 桂子
蟬時雨鳴け鳴け命ある限り（名古屋市）久野佳奈代
轟きて滝一徹を押し通す（神戸市）岩水ひとみ
古里は墓だけになりし鳥繁る（東京都荒川区）前村 和夫
瑞穂の国青田がこんな処にも（東京都足立区）三角 逸郎
秋そこに来てゐるはずの庭に立つ（枚方市）石桁 正士
荒神輿婦警の笛に従ひぬ（尾張旭市）古賀勇理央
病室の静けさの中遠花火（和歌山市）不野 公美
空蟬を握りつぶして泣く子かな

（茨城県大子町）谷田部達郎

【評】第1句。太平洋戦争末期、B29により大量の焼夷弾が投下された。「盆の月」が胸に響く。第2句。ブルームス曲の余韻に浸り乍ら端居、至福の一時。第3句。成虫になってからの蟬の寿命は1週間から1カ月程度、思い切り聴いてほしい。

高山 れおな 選

幽霊もお化けも来ない炎天ぞ

（横浜市）宮司 初枝
蜘蛛の巣に雨の宝石あなエモい（東京都足立区）無京 水彦
箱庭に入れるほどの人になれ（太田市）渋谷 今美
女郎花港の隅に遊女墓（福山市）長谷川 瞳
伯母白寿にて遠雷も聞こえずと（富山市）平松 空寅
なげあうてあとにとりあふるのこづち（川越市）大野有之介
盆踊り化粧直しの喫茶店（市川市）をがはまなぶ
舟虫も蟹も囲みし門火かな（津市）中山 道治
鉄分がはしくて夏は鉄路（富士市）村松 敦規
ロボットの運ぶビールで乾杯す

（町田市）河野 奉令

【評】宮司さん。来ないのは暑すぎるから？ 葛飾北斎は辞世で「人魂で行く気散じや夏野原」と詠んだものだが。無京さん。当方も「エモい」という俗語で句を作ったばかり。発表は先を越された。渋谷さん。自分への呼びかけ、なのだろう。

小林 貴子 選

列車かたぶき盛り上がる夏の海

（札幌市）長谷川淑子
噴水の端つこ浴びる雀たち（広島市）金田 美羽
人間学夏の宿題とりけり（千葉市）宮城 治
小さくてシンプルでいいかき水（横浜市）坪田 光世
わが床屋未だ仕上げに天花粉（東京都杉並区）菊池 和正
流離ふも帰路は飛行機夏休み（新庄市）三浦 大三
倭武多発つ音や天地を叩き分け（青森市）天童 光宏
空母へと体当りする飛魚の群（茅ヶ崎市）清水 吞舟
思い出のうりやうりや湧いて炎天下（甲府市）藤巻 嘉秀
この世には未練なき身に焼止め

（八代市）吉原利津子

【評】一句目、列車も飛行機も大きく曲がる時、驚くほど景色が斜めになる。その発見をよく生かした句。二句目、雀とも涼しさを分かち合おう。三句目、人間って何だろう。大人にも難しい宿題だ。四句目、私も昔ながらのかき水で十分満足。

長谷川 權選

なんたつて平和が宝阿波おどり

（茨木市）瀬川 幸子
八月や奈落の底に人の群（長崎市）下道 信雄
秋隣ぞ知らぬ顔で四十度（八王子市）額田 浩文
ヒグラシや隣の家はネコを呼ぶ（盛岡市）榎本 拓
死について主治医と語る端居かな（富士市）村松 敦規
帰るべき闇を忘れてゐる灯蛾（玉野市）勝村 博
茄子を焼くまだ新妻と呼ばれて（村上市）鈴木 正芳
洗うても洗うても黒垢洗ふ（彦根市）阿知波裕子
炎屋やともに涙の決勝戦（横浜市）好田 悦子
ハンモック自由に見えて不自由な

（大阪市）目下 文

【評】一席。理屈で説くより一目瞭然。三味線のリズムに乗って。二席。今も救いを求める人々。ダンテの「神曲」のような。三席。この「ぞ知らぬ顔」が恐ろしい。来年はもっと？ 十句目。ハンモックだけにかぎらない。人の浮世もまた。

俳句時評 子規の「非空非実」

岸本 尚毅

正岡子規の『俳諧大要』（岩波文庫）が四十二年ぶりに再刊された。「最良の俳句入門書」（復本一）とされるこの本のおかげで、子規は「空想と写実と合同して一種非空非実の大文学を創出せざるべからず」と説いた。

赤い椿白い椿と落ちにけり 碧梧桐
流れ行く大根の葉の早さかな 虚子
一見相反する「空想」と「写実」が、子規没後、河東碧梧桐や高浜虚子などの作や論においてどう展開したか。この観

点から近代俳句を表現史的に論じたのが井口時男『近代俳句の初志』（コールサック社）だ。写実に偏した虚子へのアンチテーゼともいえるべき、たとえば「蝶墜ちて大音響の結氷期 富沢赤黄男」のような作を生んだ昭和の「新興俳句」。それこそが、子規のいう「非空非実」の実践だと本書はいう。この視点は、従来の俳句史には見られなかったものだ。

俳句史は表現史であり、俳壇史でもある。各地の俳壇はそれぞれ独自のダイナミズムで歴史を刻んできた。子規の俳論の影響を受けた明治期の秋田の俳人たちも、東京の動きと連動しつつ、子規死後の秋田俳壇を形成した。俳句への情熱は同じだが、俳句観の違い、町と町との対抗意識、人間関係などに影響されつつ、結社が離合集散し、俳誌が生まれては消えた。京極雅幸『「非空非実」でたどる秋田近代俳句史』（秋田魁新報社）は、子規の四天王に数えられた石井露月など秋田の俳人の活動を生き生きと描く。

表現史・俳壇史のなかで子規は生き続ける。〈標味嚙に瓜と茄子の契かな 子規〉は露月の結婚を祝う句だ。（俳人）

第26回現代俳句協会年度作品賞 横浜市の、なつはづきさん(57)の「朱夏」(30句)と栃木県佐野市の水口圭子さん(78)の「消えるため」(30句)に決まった。

片山由美子句集「水柿」「香雨」主宰の第7句集。「開かるること待つ扉大巨」「露けしや鍵に公私のあることも」「たたむとき昔のにはふ日傘かな」(ふらんす堂・3080円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のほか1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます。